

和歌号行集 十冊

和書門		
一八二五	一七	一〇
號	函	冊
架	架	架

內閣文庫		
一八二五	一七	一〇
號	函	冊
架	架	架

內閣文庫		
番號	和 18252	
冊數	10 ( 10 )	
函號	202	175









著しむがけの田のさるるをいふはつらそめ世

著しむがけの田のさるるをいふはつらそめ世

著しむがけの田のさるるをいふはつらそめ世

著しむがけの田のさるるをいふはつらそめ世

著しむがけの田のさるるをいふはつらそめ世

著しむがけの田のさるるをいふはつらそめ世

著しむがけの田のさるるをいふはつらそめ世

著しむがけの田のさるるをいふはつらそめ世

著しむがけの田のさるるをいふはつらそめ世

著しむがけの田のさるるをいふはつらそめ世

著しむがけの田のさるるをいふはつらそめ世

著しむがけの田のさるるをいふはつらそめ世

著しむがけの田のさるるをいふはつらそめ世

著しむがけの田のさるるをいふはつらそめ世

著しむがけの田のさるるをいふはつらそめ世

著しむがけの田のさるるをいふはつらそめ世

著しむがけの田のさるるをいふはつらそめ世

著しむがけの田のさるるをいふはつらそめ世

著しむがけの田のさるるをいふはつらそめ世

著しむがけの田のさるるをいふはつらそめ世

著しむがけの田のさるるをいふはつらそめ世

著しむがけの田のさるるをいふはつらそめ世

著しむがけの田のさるるをいふはつらそめ世

著しむがけの田のさるるをいふはつらそめ世

著しむがけの田のさるるをいふはつらそめ世

五拾五卷一

五







うらうらとわたりてしるしを福にたぐひてせまらるるは  
 女にふくむるにあらむ男乃ち其の常におもむをむす  
 けあはせしむるをゆめとて男がうらうらとてあは  
 らむるをまじくむすむるをうらうらとす也  
 東海乃みちのそとわたりしむら常のこゝにけもあらん  
 ひらぎのふらふらふ海もていふもなりあつね程そ  
 神とてけくをひらぎとていふ也。照照いひらぎのふら  
 らむるをまじくむすむるをうらうらとす也  
 妹が門のむらぎのひらぎのふらふらとてあらん  
 又源氏とて海乃まじくむすむるをうらうらとす也  
 まじくむすむるをうらうらとす也

ついでにあらむこゝにけもあらん  
 ようもむらぎのふらふらとす也  
 一 萩めぐり乃神 ヒトヨククリノカミ 左由神と云 萩乃天一神と  
 意乃其はあらむあり。二萩とあらむも一なり  
 け神一萩はしむるをうらうらとす也  
 我らとて一うらうら乃神と云 萩乃天一神と云  
 あやむる方は其をあらむる一萩めぐり乃神と云  
 〇ひらぎのふらふら乃神也 久々の萩はあらむ  
 久々のやまら 須弥山乃神と云  
 久々の月乃神も其をあらむる萩はあらむ  
 〇ひらぎのふらふら乃神と云 萩乃天一神と云

三浦神祇考

三三







○ひびきの浮代と  
 聖王乃浮中よりまゝなり  
 よその業露文哉。日本よそくは越後天磨乃浮中  
 を甲よや。ほ標集よ。今上師のみもとにあらん  
 なぬ大臣乃およもしうあやまらしてうせのし浮  
 をかりもれよ。ほ中もて中つらとく。なぬ大臣  
 志願あひよふのあやねひびきの浮代の後あつとて  
 浮をりしと上師集  
 をへとくまたらばお約束乃るまきくとも。信はまどり  
 ○ひびきを。 田島どらりたる後よ。あそびより生あつとまき  
 みるまをひ田乃ひらひらとてわらわつ程は歳よりわ  
 ○ひびきの乃うらう。 ぬの事也

右柳乃ひら美のうらうらとてあつとまきくとも。信はまどり  
 ○人の目と。 正月一日鶴日と。二日と物。二日と物。三  
 を羊ありと半うらうら。人日八日鶴目といひく  
 け日天毛よく風うぬをまきぬらうらうらとて。うら  
 中ぞとて。南乃目といはせらと人目とま也  
 人の目もとりつと物をとどめら。まも  
 ○人がおれめと。 人をまらるやうやうとて。中も。や。だの  
 先もあつた。た。と。女の手。ほよあつとて。か。ん。と。と  
 中もあつとて。か。ん。と。と。あつとて。あつとて。あつとて。あつとて。  
 やうらう極とま也  
 家あつた。乃。杜の。あつとて。り。と。て。人。あつた。あつた。あつた。







あれを教えんがたの居あへ引くゆく居あへかた  
 あり。そをいひきゆく。百歩子歩とよ  
 ともかきあふ。死地乃ちこまきとひうのあ  
 こころ也。世のまき世人の命もこのむづら  
 居ゆきうちかどのまきなるん  
 々々又年の身をもひつられひうのあまを  
 極あへて我ゆきうに羊のあまを忘るん  
 ひまひき 爲乃まきあり  
 思われぬと弱とむむまきまきまきまきまき  
 ひめむきまきまきまきまきまきまきまき  
 思われぬまきまきまきまきまきまきまき  
 思われぬまきまきまきまきまきまきまき

ひまきまき 揚中人唐後唐の事  
 あまきまきまきの使まきまきまきまきまき  
 右相まきまき人丸まきまきまきまきまき  
 夕まきまきまきまきまきまきまきまきまき  
 右まきまきまきまきまきまきまきまきまき  
 人のまきまきまきまきまきまきまきまき  
 思われぬまきまきまきまきまきまきまき  
 思われぬまきまきまきまきまきまきまき  
 思われぬまきまきまきまきまきまきまき  
 思われぬまきまきまきまきまきまきまき







○ひらきまふ さいやう乃中なり

○ひらきぢちふ ひらきごとく 乃中なり

○ひらきまふ さいやう乃中なり

○ひらきまふ さいやう乃中なり げん仙翁はあひく仙をさふ

○仙翁一乃法の中は貴長房と引入て仙術

をとりつくりを壺中へ別世界よき人なり世は

あつた壺中天地乾坤外とはくまらるもあつた也

乾坤は天地なりげんの中乃天地は乃乾坤

なりと云也仙のさうがひある人も長房は乃

とあつたあよりつは仙翁まは竹杖と一ツも長房

はあつたあよりつは仙翁まは竹杖と一ツも長房

げんをた化しくのちりぬ

人の心をささるとらるものかまわれや

○すまゝの道ありとれつが乃うち 心教

○ひらきまふ さいやう乃中なり げん仙翁はあひく仙をさふ

よきさうぞくを引つらうひてかゝりあつた

○ひらきまふ さいやう乃中なり げん仙翁はあひく仙をさふ

○人たまひさか 出車をさかふらうとせうてい

あつたあよりつは仙翁まは竹杖と一ツも長房

○ひらきまふ さいやう乃中なり げん仙翁はあひく仙をさふ

○ひらきまふ さいやう乃中なり げん仙翁はあひく仙をさふ



○人よまれ鬼よまれ 人よあき鬼よあきと

○りし相らり 人よあき鬼よあきと

○人まら乃養 人あき鬼あきと

○ありあきをいふる世はひとあきなりとて

○入るあきなきまら人なりとてあきとて

○ひいとも 海乃あき也 侍物よあきとて

○あきとてひいともあきとて

○思あきい津乃あきとてあきとて

○少室 一ひいあきい山陰乃あきとて

○あきあきとあきとあきとあきとあきとあきと

○あきあきとあきとあきとあきとあきとあきと

○あきあきとあきとあきとあきとあきとあきと

○あきあきとあきとあきとあきとあきとあきと

○あきあきとあきとあきとあきとあきとあきと

○あきあきとあきとあきとあきとあきとあきと

○あきあきとあきとあきとあきとあきとあきと

○あきあきとあきとあきとあきとあきとあきと

○あきあきとあきとあきとあきとあきとあきと

○あきあきとあきとあきとあきとあきとあきと

○あきあきとあきとあきとあきとあきとあきと

○あきあきとあきとあきとあきとあきとあきと

○あきあきとあきとあきとあきとあきとあきと



あつたまはしほあつてさひ乃くうりうて ちん

○ちんをくうりうてさ 仁入城の事也

○ひらう乃くは 車のおよ底のまをさ也

○むかがね うはくく結くろちん

○一日乃宿よ 志をせいのをさ也

○平聖 如聖乃あし 仁博夫の事といふしあ

後古今集よ 家隆

あつたまはしほあつてさひ乃くうりうて ちん

○あつたまはしほあつてさひ乃くうりうて ちん

あつたまはしほあつてさひ乃くうりうて ちん

あつたまはしほあつてさひ乃くうりうて ちん

○百あよ 大内氏中也。百官の座をさるるあよ

あつたまはしほあつてさひ乃くうりうて ちん

あつたまはしほあつてさひ乃くうりうて ちん

あつたまはしほあつてさひ乃くうりうて ちん

○あつたまはしほあつてさひ乃くうりうて ちん

あつたまはしほあつてさひ乃くうりうて ちん

あつたまはしほあつてさひ乃くうりうて ちん

あつたまはしほあつてさひ乃くうりうて ちん

あつたまはしほあつてさひ乃くうりうて ちん

○あつたまはしほあつてさひ乃くうりうて ちん

あつたまはしほあつてさひ乃くうりうて ちん



○もつらうのうら かなつらうのうらめしうらめしうら

一 後魚とら海草の

海ご乃魚の松よ春信てもまらうのうら出ツクとそ思ふ人

うらうら一の風乃草也

○もつて地とら 天竺テンシクよん玉のな。日本よん玉の大肉う

百乃をまらひよ水を入れてまらて地とてまらひよまら

○人の物らひまらふく世とら 海うみ飛乃まらてまらまら

まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

とまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

○もみぢら ともまらまらまらまらまらまらまらまら

まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

又もみぢらまらまらまらまらまらまらまらまら

○物う記ものうき ともまらまらまらまらまらまらまらまら

まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

まらまらまらまら

○もまらまら 松乃まらまらまらまらまらまらまらまら

松もまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

○もまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

松まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

我らまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

○もまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら



























○色みらり鳥 鹿乃美あかり

○ゆりし草 ありひの美あかり

○藤乃乃はら甜 たしあま乃事りかり

○ゆりし草のそよ 漏割の水れき也

○きりし草 我家乃よし也

○きりし草乃まらり 藤よ塩よとあかり

○わらし草 ちよも也

○きりし草 印別乃名あへ 聖海乃あかり

○あはら 里の名かり

○<sup>後右</sup>あはら 月をきりし草乃あはら 風

○<sup>し</sup>あはら 出羽乃國也 月かり

○色みらり鳥のあはら 鹿乃美あかり

○ゆりし草のあはら ありひの美あかり

○藤乃乃はら甜のあはら たしあま乃事りかり

○ゆりし草のあはら 漏割の水れき也

○きりし草のあはら 我家乃よし也

○きりし草のあはら 藤よ塩よとあかり

○わらし草のあはら ちよも也

○きりし草のあはら 印別乃名あへ 聖海乃あかり

○あはら 里の名かり

○<sup>後右</sup>あはら 月をきりし草乃あはら 風

○<sup>し</sup>あはら 出羽乃國也 月かり



Handwritten title or header in cursive script.

○世に乃いふは海も ちかひたき世もなかり

○世の羽り春の暮さうかたけいりてあはれはまはる

○世の春はあけはるもあはれはるもあはれはるもあはれはる

○世のあけはるもあはれはるもあはれはるもあはれはる

○世のあけはるもあはれはるもあはれはるもあはれはる

○世のあけはるもあはれはるもあはれはるもあはれはる

○世のあけはるもあはれはるもあはれはるもあはれはる

○世のあけはるもあはれはるもあはれはるもあはれはる

○世のあけはるもあはれはるもあはれはるもあはれはる

○世のあけはるもあはれはるもあはれはるもあはれはる

○世のあけはるもあはれはるもあはれはるもあはれはる

○世のあけはるもあはれはるもあはれはるもあはれはる

○世のあけはるもあはれはるもあはれはるもあはれはる

○世のあけはるもあはれはるもあはれはるもあはれはる

○世のあけはるもあはれはるもあはれはるもあはれはる

○世のあけはるもあはれはるもあはれはるもあはれはる

○世のあけはるもあはれはるもあはれはるもあはれはる

○世のあけはるもあはれはるもあはれはるもあはれはる

○世のあけはるもあはれはるもあはれはるもあはれはる

○世のあけはるもあはれはるもあはれはるもあはれはる

○世のあけはるもあはれはるもあはれはるもあはれはる















○大和せがぬ乃とまきうらむそかりや申ゆ一遠は

○せきう乃里のあま一あたり

○大和芥屋の里乃月乃うらむ物かまじうらん

○勢田 山別乃名おあつうの勢也

○大和乃板もきしむ斗もまきうらむあはせぬ

○す

○大和乃紀 帝王乃河申あり

○大和乃神乃申其社のをあま申ははとらぬ

○大和乃あま乃申あり

○大和乃あま乃申あり

○大和乃あま乃申あり

○大和乃あま乃申あり

○大和乃あま乃申あり

○大和乃あま乃申あり

○大和乃あま乃申あり

○大和乃あま乃申あり

○大和乃あま乃申あり

○大和乃あま乃申あり

○大和乃あま乃申あり

○大和乃あま乃申あり

○大和乃あま乃申あり

○大和乃あま乃申あり

○大和乃あま乃申あり



















○あまのこひ 世をなほさそむくのまぢ也 歳暮

○すまゝとひひる ぬきぬきのあり

○流よとまほハ 何事もなほさそむくのまぢ也

○あまのこひ 無人のまぢ也

○すまゝとひ たりまぢなり

○あまのこひ たりまぢなり

○あまのこひ たりまぢなり

○あまのこひ たりまぢなり

○あまのこひ たりまぢなり

○あまのこひ たりまぢなり

○あまのこひ たりまぢなり

○あまのこひ たりまぢなり

○あまのこひ たりまぢなり

○あまのこひ たりまぢなり

○あまのこひ たりまぢなり

○あまのこひ たりまぢなり

○あまのこひ たりまぢなり

○あまのこひ たりまぢなり

○あまのこひ たりまぢなり

○あまのこひ たりまぢなり

○あまのこひ たりまぢなり











思ひよりのあるむ乃とやらんがし感てこそ思ひよ

○一切乃と云はれは人の心をよめて笑ふをよと云ふは

○お印しゆねをラウキテイ拉鬼神を歌の中にとりて

とぞおもひしとらめゆる ラニウカヒヒク又或書よありや

○物やうらうらう筋成りひのうらむらむらむらむら

○ぬあつさむをうらむらむらむらむらむらむらむら

○きとひわづくはくはくはくはくはくはくはくはく

○初らむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

○とらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

○とらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

○とらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

順徳院乃決製

○うひよひの海もうつとれて雪なるはよくあつらふ

○とらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

○とらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

○とらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

○とらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

○とらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

○とらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

○とらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

○とらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら























これよりして菊とも菊と云ふ。おとよのちよと  
りつらた乃古事也。其後より

位吉や庭のあつられ菊も世井をてえり人々  
ちて

○つごさ然乃漢 紀列へ 風葉漢と也

○風葉のほ乃白さしつらよあふりるる人々

○ころ傍 箱の浦 小津乃松原 石津乃松原

いししも糸束の名をん

○まてしもの事 じり 東西よ。高田乃内

勇士あり。我家乃ほのよよひつら乃るる。池を

具あり。人をまやまたさるにより。此時事件の

いしを討つとあらあらるる。を矢おけい

志く花を記たり。されを家接子なり。是は花

くさちりてさくとしり

○此由不納履 李下不冠 冠 とつらハ 文選乃相

つらころを。此のまをけハ 呂氏也。つらく

おま乃本下にくハ。よとあきて冠とるる。は

くすま。よりやまもとあまじり。人々

あまじりやまよとせ。人々のをさるひ。か

はあ後もちあまじり

○六合 田方上下なり。六合とあてくまゆらと

○よむらり

○み行ハ 本火古今あり。穀を加へく六府



○四徳ハ元亨利貞有り 周易はみこあり

○三徳ハ智仁勇あり

○五徳ハ君臣父子夫婦兄弟朋友あり

○山吹を伴ふまよふやうにむしや中と乃必ある乃

まよある男山吹る乃必あそひのまよは女よあひ

まよるまよひのおもひあまらうまよるまよは女

乃あやまふはまよとあまらうまよるまよは女

いひまらひあまらうまよるまよは女

あまらうまよるまよるまよは女

の伴をうはしりまよるまよは女

まよるまよは女

あまらうまよるまよは女

まよるまよは女

あまらうまよるまよは女

まよるまよは女

あまらうまよるまよは女

まよるまよは女

あまらうまよるまよは女

まよるまよは女

あまらうまよるまよは女

まよるまよは女

あまらうまよるまよは女



さくらをたもひて、宿をほくりく光の宿へ

をくりあつりそ宿よ

昌喜季出家花不見玉女多意

あの人ほ宿乃そちとわ

日まうそく、ちまわらじく、ちまわらじく

田形うねり

吳行集卷第十

寛文十三癸丑年三月吉日

水谷小無傍園板



